

喜怒哀楽

8-9
Vol.99

こころに響くことば

新潟県糸魚川市出身の批評家・随筆家若松英輔氏の著書からこころに響いた言葉を抜粋してご紹介します。



「多忙な人」より抜粋
『詩集 幸福論』(世紀書房)

忙しすぎては いけない
大切な人に
会えなくなつて
ひとりで困っているのを
見過ごしてしまう
忙しそうに していると
心を 開いてくれるはずの人が
いつの間にか
黙ってしまう

●若松英輔

1968年生まれ、慶應義塾大学文学部仏文科卒業。
2007年「越知保夫とその時代 求道の文学」にて第14回三田文学新人賞評論部門当選。
2016年「叡知の詩学 小林秀雄と井筒俊彦」にて第2回西脇順三郎学術賞を受賞。

「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

温古知新 ⑤ 「菜根譚」24

暑い日が続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか。今月も「菜根譚」前集90項からお届けします。

己を捨てては、其の疑いに処ること母れ。其の疑いに処らば、即ち捨つる所の志も多愧ず。人に施しては、其の報いを責むること母れ。その報を責むれば、併せて施す所の心も俱に非なり。

(己)を捨てたら、それを疑ってはならない。それは自分で自分を疑うことであるから、自分を辱めているようなものだ。他人に施しをしたら、見返りを求めてはならない。もし求めれば、施すという高い志を捨てることになるからだ。

天、我を薄くするに福を以ってせば、吾が徳を厚くして以って之を返えん。天、我を勞するに形を以ってせば、吾、吾が心を逸して以って之を補わん。天、我を厄するに遇を以ってせば、吾、吾が道を亨らして以って之を通ぜしめん。天も且つ我を奈何せんや。

(天が私にわずかな幸福しか与えないのならば、自分の徳行を高くすることで対処しよう。天が私に苦勞を与えるのなら、自分の心を鍛えて調和させよう。天が私に災いをもたらすなら、自分の信じる道を貫

て天に通じさせよう。例え天でも、私をどうすることが出来るだろうか。)

見返りを求めず、自分の意志を強く持つこと。自分の行いを信じてこそ、成功への第一歩、ということでしょうか。

貞士は福を徼むるに心無し。天、即ち無心の処に就きてその表を牖く。嶮人は禍いを避くるに意を着く。天、即ち着意の中に就きてその魄を奪う。見るべし、天の機権の最も神なるを。人の智巧は何の益あらん。

(節操の有る者は幸福を求める心が無いので、天はその無心の者に報いるため正しい方向性を示す。心根の卑しい者は不幸を避けることに執着しているので、天はその執着心を碎き命を脅かして警告をする。天の道が神秘的な働きを持っているのは明らかであり、人間の知恵がそれを超える事は無い。)

下手に知恵を回す事より、悠然と構えていてこそ、自然と様なものを味方につける事が出来るという事。

なかなか、自分の意志を強く持つのは難しいですね。だからこそ、自然体で何かにとらわれすぎないようにすることが大事なかもしれません。(古川久美子)

銀漢俳句会本部句会

主宰 伊藤伊那男様
(東京都・千代田区)

7月14日(土)、神保町の「ひまわり館」で行われた「銀漢本部句会」にお邪魔しました。地下鉄から地上に出ると、アスファルトから陽炎が…暑い、汗が噴き出してくる。通常は60名程参加するところ暑さのために欠席の方が多く、本日は50名の参加者で句会スタートです!

今日の兼題「蟬」と「裸」を含む、当季雑詠計5句出句の5句選。清記用紙が回覧され、各人これはいいな、と思う句を自身のノートに書きつけ清記用紙を右隣の方に回す。皆さん手慣れたもので、選句が終わる頃には一通り選も終わり、用紙を提出して休憩に入る。



▲季語の本意、作品の背景を懇切丁寧に説明する伊藤伊那男主宰

一つ目の「裸」という兼題だが、気になるのは、夏でも春でもいつでもいいという裸が多かったこと。季語には「本意」がある。「暑い」ことが前提にあつて裸が出てくる。赤子が裸だとか、風呂から出たら裸だというのは、冬だつて風呂から出たら裸だし、入る時も裸。つまり季節感がある裸かどうかが大事。もう一点は、人の裸じゃないと困るわけで、ミケランジェロの裸は困る。キューピーや裸婦像の句もあつたが、これも一年中裸であり季語にはならない。写真の中の裸も微妙だと思つている。要は暑い、という雰囲気が出た裸を句として作る、ということとを覚えていただきたい。

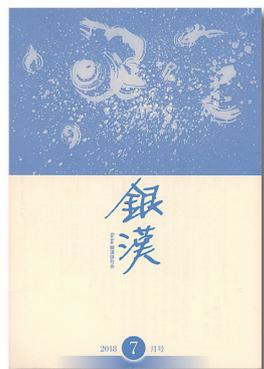
高浜虚子に

「裸子をひつさげ歩く温泉の廊下」

という、山梨の下部温泉で詠まれた句があるが、このあたりから季節のわからない裸が出てきたように感じる。

裸の子ということであれば、鷹羽狩行に「天瓜粉しんじつ吾子は無一物」という句があるが、まさにこれが何もつけない裸の状態。ここに夏の季語、天瓜粉をもってきたからすごい句になつている。ただ赤ん坊裸ではないということ。

続いて「蟬」。松尾芭蕉が奥の細道の山寺で作った有名な句に「閑さや岩にしみ入る蟬の声」があるが、ここに至るまでに芭蕉は何度も推敲している。「さびしきや岩にしみ込む蟬の声」その前が「淋しさの岩にしみ込むせみの声」、その前が「山寺や石にしみつ



▲毎月100ページ超の月刊「銀漢」

く蟬の声」。こういう変遷を経て、この句はできてきている。この蟬は何蟬だろうかという斎藤茂吉と小宮豊隆の白熱した蟬論争も有名。

芭蕉は生まれ故郷、伊賀上野の藤堂家の次の当主である2歳年上の良忠の小姓として仕えた。勉強相手であり、遊び相手でもあつたこの良忠が若くして逝去。芭蕉とともに俳句を学んでいたこの良忠の俳号が蟬吟であり、この句の背景には蟬吟を偲ぶ心が出ているのではないか、そんなふうを感じる。

あれから20年余、良忠が亡くなった春、芭蕉45歳の時に藤堂家に招かれて詠んだのが、かの「さまざまのこと思ひ出す桜かな」という句。

この句自体、面白くもなんともないが、その歴史があるからすごい。万感の思いがこもっている。芭蕉にとって、蟬吟の影響はすごく大きかつたと思ふ。

続いて、今日の主宰選の講評です。

山寺の磴千段に万の蟬 伊藤庄平

まさにその芭蕉が尋ねた、山形県の山寺。千段というのはたくさんという意味。さらにその千段を上がつていく

と万の蟬がいたということ。数字を二つ重ねて作った、技のある句。

子の手よりくぐもる蟬の羽音かな 朽木直

緩くつかまなければ蟬は死んでしまう。その指の間から羽音が漏れてきた。細かく見ている。

蟬時雨羽黒の磴はまだなかば 三代川次郎

これも奥の細道シリーズ。羽黒山は一六四〇段。その磴を下から登っていくわけだが、蟬時雨の下でようやく半分まで来たな、という実感がよく出ている。

人の輪の真中で切る西瓜かな 多田悦子

人がぐるっと円形になり、その真ん中に円形の西瓜がある。二重丸になっているわけで、そのところをうまく詠んでいる。

滲みでてくるやうに蟬鳴きそむる 辻隆夫

初蟬はまさにこんな様子。そのじわじわとくる感じを捉えている。

大木の母性に抱かれ蟬の鳴く 中村孝哲

名乗りを聞いたなら、やっぱり孝哲さん、小説的な手法を感じる。「母性に抱かれ蟬の鳴く」は、大木に頼る蟬のつきそうな木ということ。その辺の感じが独自の描き方で表現されている。



▲猛暑もなんのその！ 俳句愛にあふれた会でした

浦風の机上をゆけり夏期講座

宇志やまと

私だけが採った句。林間学校みたいなところで窓を開け放って風が吹き抜けている、いかにも夏期講座の様子がよく出ている。

蟬捕りや電柱のまだ木の時代

畔柳海村

今はコンクリートの大きい電柱。確かに懐かしい風景で、私たちの小さかったときの感じが出ているおもしろい句。

城山に火攻めのごとく油蟬 杉阪大和

「火攻めのごとく」で、憑かれたような鳴き方が出ている。

まだ風に馴染めぬ腕更衣 堀内清瀬

「馴染めぬ腕」がいい。更衣はしてみたものの、どこかスースーするという感じがでている。

打水を多めに通夜の家の前 朽木直

これも私だけ採ってるね。うまい句。これから通夜客がくる、そのために清める、涼しくする、という二つの意味。それを多めにという言葉で表している。打水の句としてとてもいい。

仮縫を走るミシンや巴里祭

宇志やまと

まあ、よくこんなの思いつくね笑。「仮縫を走るミシンや」なんてなかなか出てこない。

背番号無き子等もゐる蟬時雨

小山蓮子

今日は蓮子さんの句、3つもいたいたんだね。これは今日最高の10点句、なかなかレギュラーに入れない子もいる、ということをやうまく詠んでいる。

効き目ある医師の笑顔や青葉風

小山蓮子

青葉風で決まるかどうか、というところがあがる、上のフレーズがうまい。

本堂を疾風のやうに跣の子 森羽久衣

村の小さなお寺かどこかで、裸足の子どもたちがはしゃぎまわっている。開けっ放しになっているところをそのまま突っ切って向こう側に出た、そんな風景だと思ふ。力のあるいい句。

掛けてより肩に力のサングラス

杉阪大和

いつも肩に力が入っているけど、さらに力が入ったという大和さん(笑)。

初蟬のまだ風の音にまぎれつつ

大溝妙子

しみじみした句。さっきの滲み出るという感覚と同じようなところを詠んでいる。「あれ、風の音？でも蟬なんだ」という微妙な始まり具合を、地味だが丁寧にものを見て詠んでいる。

百円分動く自動車蟬時雨

小山蓮子

遊園地の子どもが乗る車。百円分というところが面白い。

鉢物に水やつてるる裸かな 小泉良子

味があるよね。これはまさに夏の暑いときの裸。どこかの下町かもしれない。暑い盛りなんでしょう、裸でもいいや、という感じが出ているうまい句。

◆主宰作品

裸の父女系家族に厭はるる

空蟬のなほ掌に爪立つる

有難く受く山寺の蟬の尿

「銀漢」創刊の言葉より(2011)

俳句は短いが万葉集以来、千数百年にわたり先人が心血を注いで築きあげた詩歌の歴史の結晶である。その途方もない歴史を思えば、少しばかりの才能や、少しばかりの努力で俳句が成就すると思ふのは実におこがましいことだと気づくはずだ。真摯に先達の努力に学び研鑽する、自分を生かしてくる天然自然に感謝することが出発点である。若者には無垢と野心が、熟練者には蓄積された人生経験と知恵がある。各々の立場で、只今の自分が持っているすべてを絞り出す覚悟で銀漢俳

句会に臨んでいただきたい。私もその覚悟である。充実した生活を送るため、幸せになるため共に学びたい。

★改めてこの言葉を読み、句会に向かう皆さんの真摯な心構えの理由がわかった気がした。句会後の懇親会でも主宰は「参加している方は、介護をはじめ家庭の様々なことがありながら、万難を排してこの句会に参加している。だからこそ楽しかった！といてまた明日から頑張れる、そんな句会にしたいし、それが幹事の仕事」と仰っていた。銀漢亭の店主と主宰という、二足の草鞋を履いているが、第一線の企業人だったこともあり、会の運営もスムーズで会員もどんどん増えている。「自然に感謝し、幸せになるために共に学ぶ」、本質を突いた、いい句会だった。(木戸敦子)

句集『然々と』より
或るとき家族の数の福寿草
すれちがふ人はもう過去町師走
秋風を聞ききたる橋の半ばかな



▲7月に出版したばかりの第三句集『然々と』

問い合わせは 銀漢発行所まで
〒101-0051
東京都千代田区神田保町2-20 東明ビル2階B
電話/FAX 03-6272-4524
mail: ginkan_haikku@ybb.ne.jp

上林洋子様 『歌集かたくりの花』

(新潟市・東区)

今年4月『歌集かたくりの花』を上梓した上林洋子さんは、全盲になられてから短歌を詠み始め45年。日常や歌集のこと等、お話を聞きしました。

Q 幼いときの話から

終戦の年、昭和20年10月新潟県の旧京ヶ瀬村(現阿賀野市)で生まれました。上に姉がおり、また女の子ということでは父はとても落胆し、幼い頃は「お前は木の股から生まれた」という言葉を信じていました(笑)。終戦後、父は生き方が変わり何もしなくなつたので、母は姉一人、弟二人の4人の子どもを抱え、畑仕事と和裁で細々と生計を立てていました。強度近視で小学4年から眼鏡を着用、今考えれば緑内障の眼圧の発作だったのでしよう、中学3年の授業中に強い頭痛が襲い保健室に運ばれたこともありました。その後も度々ありましたが、貧しかったの



▲上林洋子さんと4代目の盲導犬ユズ

で親が心配しないよう、痛いときはじっと我慢してやり過ごしました。縫い糸のほろほろ解けゆく哀しさよ亡母縫いくれし祭りの浴衣

Q 近視ではなかったということ?

高校も行けないなら、早く家を出たいと思い、15歳で東京し川崎の准看護師養成所へ。半年ほど経った頃、突然教務室に呼ばれ「あなたの目の病気が何か知っていますか」と、そこで初めて緑内障の診断を受けました。新潟に帰り、父と大病院の眼科に行くと医師が「どうしてここまで放っておいたんだ、親の責任だ」と叱責しました。すぐに手術をして半年入院、養成所へ戻れるという期待は叶わず、1年遅れで盲学校に入学。さらに2年間で鍼灸師の資格を取り、そのお金は父が出してくれました。

見えし日の想いの残るネクタイを父の形見の中よりもらう

その後、盲学校で弱視の夫と出会い結婚、一緒に治療院を開業。二人目の子が生まれた27歳のとき、夜泣きをすする息子にミルクを与えようとすると、前の晩まで見えていた哺乳瓶の目盛りがどうしても見えない。220mlのミルクが作れないのです。ついに見えなくなつたと思うものの、二人の子どもを抱え待ったなし。220mlはわからなくても牛乳瓶200cc+スプーン一杯位、すべてこれでいけばいいと思つたのです。そんな試行錯誤の繰り返しで生きてきたように思います。眠りたる吾子の口元まさぐればミルクに濡れてやわらかきかな

Q 短歌との出会いは?

子育て中も手術を繰り返していると、ヘルパーさんに「辛いときは短歌を詠むといいわよ」と勧められました。当時聞いていた朗読図書で、窓一つしかない獄中の死刑囚が、瑞々しい短歌を詠んでいることに感動し、光が差したので。見えていた過去と見えなくなつた今がある。記憶を呼び覚ましながら、過去と今とをつなぎ合わせれば、私にしかできない表現がきつとある、と。作つた歌は最初はテープに録音、子どもが大きくなると子どもに書いてもらい、今は音声を頼りに操作可能なパソコンを駆使し、自分で文字の処理ができるようになりました。

度重なる手術の際、麻酔ショックで気絶したことも。「麻酔で命を落としたりどうする」という夫の言葉に散々抵抗しましたが、両眼摘出を決意しました。

我のみの知れる哀しみ両の眼の義眼洗いて包みて眠る

この時の歌が毎日新聞社が発行する「点字毎日」の年間賞を受賞しました。

Q 今回の歌集上梓はなぜ?

夫が「まとめて形になるものにした方がいい」と背中を押してくれました。



▲家族や生活の歌650首を取めた『歌集かたくりの花』

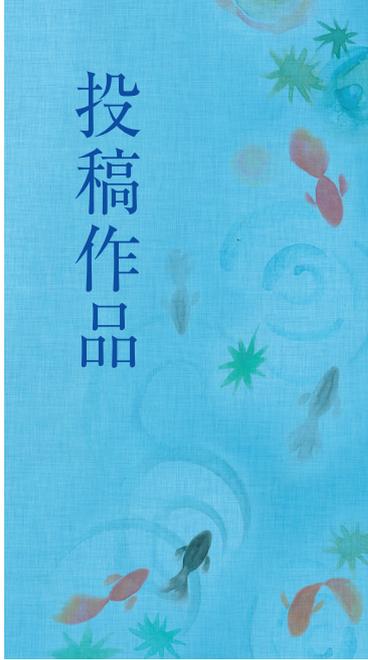
Q これからは?

4月に夫を亡くし、6月には期限満了で3代目の盲導犬ともお別れ、今はこの4代目のユズを杖に暮らしています。東京の息子は「こつちに来て一緒に住もう」と言ってくれますが、ユズは初めて会つた瞬間、魔法にかけられたみたいに私の足元にまとわりついてきたんです。助け合う仲間も大勢いるし、この子と一緒に生きていこう、今はそう思っています。これから挑戦したいことは、スマートフォン! 様々なアプリを活用すれば、まだまだできることが広がる気がします。

人生のどどのつまりは皆ひとり一合に満たぬ明日の米研ぐ

★本当は教員になりたかつたという上林さん。49歳で盲導犬を迎えてからは毎朝45分の散歩で足腰を鍛え、富士山や立山等多くの山を踏破している。優しい語り口の端々に賢さがにじみ、「やればできる」を信条にした創意工夫と数々の経験が、今の上林さんを形成している。幾多の厳しい現実を生き抜いてきた強さと潔さ、よりよい人生に向けチャレンジする精神、わが身を恥じ入るばかりだった。(木戸敦子)

投稿作品



短歌

※誌面の都合上、300作品を超える投稿があった場合、掲載はお一人さま1作品、先着300名様までとさせていただきます。今回の投稿作品数は、265でした。
※しめきり 2018年9月14日(金)まで ※作品は原稿どおりに掲載しております。

- 1 薪木たきぎ焚く生活くらしも忘れいつしか昭和生まれも遠くなりけり 渡部美代子(山形県)
- 2 国会の空吹き荒れる青嵐抗議の声の高く響けり 関原幸子(東京都)
- 3 もくもくと噴火のごとき栗の花平屋一棟呑み込みて咲く 青木日出男(群馬県)
- 4 免許証返納済み戻されし用済み
の穴妙に淋しく 宇都木安子(東京都)
- 5 オロロンオロロンの夏に汗して四十年別れのマラソン羽幌の町とも 早坂絃司(北海道)
- 6 西空の澄みてくる昏れ方に鯨雲湧く諏訪口あたり 土屋喜雄(山梨県)
- 7 この光明るい未来あるごとし夢を追いかけて生きて生く 峯岸信子(東京都)
- 8 桜桃忌太宰の書物手にかかえ梅雨空の今日私はメロス 阿部澄江(宮城県)
- 9 二十年前アジサイの朝あさ妹は逝き「隅田の花火」今年も咲けり 濱崎祥子(鹿児島県)
- 10 抱きたいの思いかなぬ亡き妻へひ孫供える花に手を添う 守安幹男(岡山県)
- 11 地震多発海の音山の音聞き生きる地球の鼓動を覚ゆ 寒川靖子(香川県)
- 12 三万日生ききし軍国少年の護憲まますすつのるこのころ 黒澤正行(福島県)
- 13 七夕の会と称して半世紀八十歳終止符の頃 田中豊恵(新潟県)
- 14 ひ扇の花びら半円はん点に扇子を開く名前のごとき 大鳥居牧子(東京都)
- 15 若葉もえツバメの子供ら元氣よく早く大空飛びまわりたし 高橋登志子(新潟県)
- 16 一つの日か集えるを想い足腰の弱りし吾れの歎き伝えむ 中田妙子(東京都)
- 17 鈍色に水無月の雨降りそぼつ筐に願いを孫と結びぬ 内藤明子(東京都)
- 18 生まれきて有為転変の世の中を子が親になり子が親になり 門田善二(兵庫県)
- 19 昼の田に同じ形の影連れておたまじゃくしのゆらゆら動く 桑原謙一(群馬県)
- 20 今日ひと日ゆつくりと煮る花豆を外より雨の音のみ聞こゆ 中沢敬子(千葉県)
- 21 サッカーに湧く赤い月、十三の焼土に逃げたあの赤い月 高須 孝(愛知県)
- 22 僻耳ひきみみになりて心の塞ぐ吾もの言わぬ花に心を寄せぬ 西山知子(岡山県)
- 23 戦争の惨禍に誓ひし九条の不戦厳守はこの国のかたち 村山徳英(埼玉県)
- 24 早苗田は鶯より高く伸び切って今年としの刈りは秋を待たぬか 合田浩子(茨城県)
- 25 初蟬をきけば声なき夫のこえ遠く近きに風そよぐ日は 小川 陽(大阪府)
- 26 国人は太平洋ばかりを見て居れば船団・ミサイル日本海より来にけらし 中村万年青(京都府)
- 27 紅をさし鏡にむかい微笑めばつとよみがえる青春の日々 岩崎令子(大阪府)
- 28 会う人によく走っているといわれ一人てれるマラソン練習 新井 賢(埼玉県)
- 29 辛きこと数多ありしも乗り越えて七転八起支えに生きる 早坂保文(宮城県)
- 30 明けきらぬ野道横切る若狐遊び足らぬか梅雨の晴間を 高田實貴男(群馬県)
- 31 被災地は猛暑の中で死ぬ思い政府はカジノと6増の狂 坂元正憲(東京都)
- 32 宇宙から国境はない青い星 木村洋一(新潟県)
- 33 また一人増えて寂しい墓参り 細川光子(栃木県)
- 34 居たかいと訪ね来し友今は亡し 石原 岳(群馬県)
- 35 父の日や八十三歳未体験 阿部 至(埼玉県)
- 36 正直の文字を政府にぶつけたい 原 崇雄(埼玉県)
- 37 真摯とは嘘つくことかと子に問われ 石尾曠師朗(東京都)
- 38 目標は世話をかけずにあの世逝き 守屋高雄(岩手県)
- 39 犬亡くしメ切り書いてまきらして 大橋絵代(千葉県)
- 40 割勘で下戸も酒家の仲間入り 長谷川庄二郎(千葉県)
- 41 延命処置是非へ揺れてる胸の内 小山恵美子(大阪府)
- 42 パスモより先を行って無入駅 丸山芳夫(東京都)
- 43 失念しみごと弁解年の功 久保壽雄(北海道)
- 44 宅配の野菜お米と母の文 大久保アヤ子(東京都)
- 45 ねえーあんた何時ものボヤキ聞きたいの 関本 守(新潟県)
- 46 親ごころ切っても切れないはずが今 奥那於子(大阪府)
- 47 亡母の年近づいて来るどうしよう 佐伯セツ子(香川県)
- 48 うるさいが元氣な妻がいてくれる 岩崎政弘(岡山県)
- 49 まとまらず心が迷う落ちつこう 松田義登(福岡県)
- 50 人間の汚れ学んだゴミ拾い 鈴木義雄(福島県)
- 51 打ち上げられたマグロが並ぶ治療院 日黒豊光(福島県)
- 52 サッカーの力を信じ人の海 近藤富夫(東京都)
- 53 ほろ苦い過去も引き摺り生きる古い久本に地(岡山県)

川柳



俳句

- 54 トランプに比べりゃましとあきらめ
る 橋本世紀男(東京都)
- 55 ママじゃあねえ猫ペランダからダ
イブ 田中こづえ(北海道)
- 56 朝いちのウォーキングや初夏の風
田中恵美子(山形県)
- 57 校歌高らか米寿の集ひ風薫る
田野倉くにお(東京都)
- 58 ペン皿に鉛筆ならべ鷗外忌
天野輝子(東京都)
- 59 人の世をしなやかに生き合歡の花
井原毬子(東京都)
- 60 紫陽花やきのふより濃きけふの空
川口 襄(埼玉県)
- 61 溪蓀^{あやめ}咲く中を嫁入舟は行く
松山柚子香(東京都)
- 62 本心は語らず夜の水中花
環 順子(東京都)
- 63 紅葉散る橋上に立ち思ひけり
松田重信(埼玉県)
- 64 山車を引く法被女や三社祭
古谷 力(東京都)
- 65 振花やねじれるほどに思慕の念
西條公雄(埼玉県)
- 66 虫干や父の形見をそつと撫つ
大谷 茂(埼玉県)
- 67 申し分なき炎暑なり忍一字
内河邦久(東京都)
- 68 友の恋打ち明けられし夕端居
高崎登喜子(東京都)
- 69 山帽子今日も元気な登校児
道給一恵(埼玉県)
- 70 柿若葉出勤の子の声高し
竹本美美子(新潟県)
- 71 「モネ」を見に装具つけるや若葉風
松尾らん(東京都)
- 72 夏暁や米寿を超えて意新たに
齋藤光雄(新潟県)
- 73 原爆の日よ人間に人になれ
福岡 悟(東京都)
- 74 雲の峰うかと躓く石ひとつ
紺谷睡花(東京都)
- 75 風鈴のうつつに鳴いてやつれ猫
服部八重子(東京都)
- 76 手土産に八重の十葉喜ばれ
水落重式(新潟県)
- 77 睡蓮の真つ白に咲き夢枕
九法活恵(埼玉県)
- 78 雪洞に身を入れて釣る岩魚かな
井上静夫(栃木県)
- 79 祭り笛小さな村が動き出す
村田吉雄(東京都)
- 80 形代に息を吹きかけ燃やしける
白戸麻奈(東京都)
- 81 草笛の鳴るまで粘る下校の子
山崎吉晴(群馬県)
- 82 炭坑^{やま}絶えてポタ山さえも緑さす
濱田イサオ(福岡県)
- 83 鯛湧くバケツを提げて一走り
居原田暹(大阪府)
- 84 砥ぎ方を教わった畔梅雨の朝
五十嵐睦博(新潟県)
- 85 広げては畳む終活夏座敷
日名子春実(群馬県)
- 86 膝折りて目線に結ぶ花菖蒲
三津木俊幸(千葉県)
- 87 炎天のバックネットに子の笑顔
椋本望生(大阪府)
- 88 草に消ゆ蛇の全長チャシの跡
梶 鴻風(北海道)
- 89 吹く風に大の字に寝て立夏かな
上村元義(神奈川県)
- 90 物を食ふ母の団扇を背にうけて
田中 昶(鳥取県)
- 91 児の寝息母の右手の団扇風
近藤薫也(千葉県)
- 92 羽脱け鳥妻の機嫌をとりきれず
北野耕兵(千葉県)
- 93 梅雨の弔ひCメール打つ関ヶ原
光成高志(千葉県)
- 94 漱石やロンドンなつかし熊本も
五味田幸夫(東京都)
- 95 父の日や父はいつでも木のほひ
二瓶邦枝(埼玉県)
- 96 万緑の藻岩^{もいわ}山に頻り流れ雲
堀田寿美子(北海道)
- 97 雲の船名月乗せて中天に
津田卿雲(岡山県)
- 98 遠けれど初郭公や三声ほど
阿部徳夫(宮城県)
- 99 幼子の眠りを誘ふ団扇風
平林義康(兵庫県)
- 100 居眠りの老木起こす油蟬
松前邦広(千葉県)
- 101 一行詩夏オリオンに照らされて
佐々木素風(新潟県)
- 102 夏逝くやどこか空虚な顔ばかり
宮中康雄(熊本県)
- 103 風薫る竹百幹を揺るがせて
高松玲子(埼玉県)
- 104 しばらくを青葉若葉に身を曝す
重原爽美(新潟県)
- 105 むらさきは雨を呼ぶ色花菖蒲
堅田秀子(東京都)
- 106 青柿やガキ大将のもうさわぐ
湯浅芳郎(岡山県)
- 107 漣が一つ静かに植田澄む
大橋恒次(新潟県)
- 108 夕涼やチェロ弾く男漁師宿
小島岳青(新潟県)
- 109 新緑や花嫁長きべール曳き
中島光江(埼玉県)
- 110 百本の蔭の生まるる夏木立
本庄準也(埼玉県)
- 111 雨の日をくりかへしつづつ梅実る
井上氣海(広島県)
- 112 好敵手同じ癖ある六月忌
浦橋濁雪(兵庫県)
- 113 草とるもとらぬも勝手老いならば
長峰正晴(千葉県)
- 114 花火師の夢の競演宙に舞う
古閑智子(神奈川県)
- 115 墓狙ふ蛇を一突き仕留めけり
津布久信雄(東京都)
- 116 尼寺へ石段のぼる白日出傘
鈴木清子(埼玉県)
- 117 澁刺と梅雨の傘行く登校路
大阿久雅子(埼玉県)
- 118 脳トレの解けぬパズルや夕薄暑
大塚徳子(埼玉県)
- 119 お花畑星座のごとく広がり
片山茂子(埼玉県)
- 120 青鷺も吾を観察してをりぬ
吉里ひとみ(東京都)
- 121 やはらかき友の眼差し合歡の花
川嶋法子(東京都)
- 122 百歳時代備え云々つづし燃ゆ
岩村 昇(神奈川県)
- 123 梅雨晴れ間さて何からとどうでまくり
河野静子(埼玉県)
- 124 只今変身鏡の中のピカッ
白松いちろう(千葉県)
- 125 白南風のうへを飛行機交はれり
若月理依子(新潟県)





- 126 老いてなほ行く道歩々に梅雨の底
青木ケン子(埼玉県)
- 127 青鷺の一点見詰め動かさる
吉村充治(埼玉県)
- 128 掛けられし袋をつつむ日のぬくみ
関山恵一(神奈川県)
- 129 あぢさゐの満開祝ふ佳き日かな
中嶋清子(佐賀県)
- 130 たどたどし文字に夢ある七夕や
中田文子(大阪府)
- 131 口喧嘩できる日日あり桜餅
佐野和彦(静岡県)
- 132 リハビリも今日はこまで草の餅
宮宅芳子(岡山県)
- 133 水と灯のあやなす庭や夏料理
一瀬正子(埼玉県)
- 134 あさなげに雉の高鳴き癒されり
有坂馨園(福島県)
- 135 江の電に乗りたし四葩訪ねたし
寺内 佶(埼玉県)
- 136 痛み耐へ寝返たる身へ青葉木菟
杉原明子(静岡県)
- 137 雨あとの雫きらめき濃紫陽花
小澤円梨(静岡県)
- 138 ホトトギス白神の峰こだまして
斎藤博洋(秋田県)
- 139 湧き上る阿形のさまの夏の雲
磯部 力(新潟県)
- 140 梅雨晴や水倉染むる村静か
夏井寛治(新潟県)
- 141 婦校児のポツケにのぞく青蛙
清まさじ(静岡県)
- 142 肅肅と蟬に成りゆく午前四時
小林七重(新潟県)
- 143 青梅や人生航路儘ならぬ
溝畑美代子(埼玉県)
- 144 夏空に歓声あがるホールインワン
杉村美保子(岩手県)
- 145 締切を忘れてをりぬ天道虫
橋本良子(埼玉県)
- 146 苧や墓標二つの武家屋敷
中野勝子(鹿児島県)
- 147 万緑や富士は片肌雲を脱ぐ
神 一男(静岡県)
- 148 六月のうるむ夕日か二番ホーム
安部 哲(新潟県)
- 149 万緑や崖に古城のライン川
間森 坦(兵庫県)
- 150 身罷りし姑の笑顔や梅雨に入る
星 一子(神奈川県)
- 151 馬のかほ長きままにて祭かな
喜龍けん(滋賀県)
- 152 秘密基地おやつは森のさくらんぼ
中村康浩(福岡県)
- 153 紫陽花のよこローズマリ背伸びして
長谷部喜代子(大阪府)
- 154 前世は鯰現世はただの人
岩田 信(神奈川県)
- 155 浅耕の下に古墳や梅雨に入る
大場岬月(長野県)
- 156 七夕や幼きねがひ隠れ居たり
坪田勝秀(鹿児島県)
- 157 啓蟄は一冬振りの美食かな
油谷博子(兵庫県)
- 158 髪染めて軽き心や夏の空
金子範子(高知県)
- 159 大施餓鬼僧も壇家も皆老いて
浅海和代(東京都)
- 160 山法師一期一会の別れあり
中山日出子(大阪府)
- 161 白紫陽花大輪のなかを夫の逝く
黒石正子(埼玉県)
- 162 八強はするりと零れ合歡の花
中川義彦(新潟県)
- 163 敦忌や雨の鎌倉東口
中澤寿美(神奈川県)
- 164 人生の終いに備え夏祓
齊藤安弘(神奈川県)
- 165 子等待ちし遠足流す青嵐
岡村君枝(茨城県)
- 166 炎天や又もやサイレン擦り抜けり
藤井春三(埼玉県)
- 167 黄八丈紡ぐ老女や島薄暑
山田楽山(埼玉県)
- 168 すこやかに昭和一桁桐の花
大窪美代子(大阪府)
- 169 初物のメロンほんのり匂ひたつ
益永克之(福岡県)
- 170 今こそが決断のとき梅雨に入る
井田由利子(宮城県)
- 171 黒蟻の数千匹の大行進
宇田川正雄(埼玉県)
- 172 平成の頂下りる夏帽子
高垣勝代(大阪府)
- 173 背の高き祭浴衣の伊達男
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 174 会釈してすれちがふ人日傘の人
若林卓宣(三重県)
- 175 新樹光今日の命の糧となし
木村 舩(山形県)
- 176 ドロップにわだかまり溶け虹立り
清水君江(埼玉県)
- 177 天国の母に見せたきあやめかな
本間ミネ(新潟県)
- 178 明日への色競ふかに七変化
本間 進(新潟県)
- 179 風薫る小江戸に多き異邦人
永田歌子(埼玉県)
- 180 無事なれや遠く巣立つ子朝茜
柴田恵美子(北海道)
- 181 農具皆離せば入りぬ蟬時雨
菅原キイ子(宮城県)
- 182 蓮ひらら一片落ちて飛天の小宇宙
安田芳江(茨城県)
- 183 禅定の石碑をおほふ夏の草
有田俊一(埼玉県)
- 184 梅雨晴れて仁徳御陵に松香る
沖 惇子(大阪府)
- 185 星涼し明日履く靴をそろへけり
藪原保子(東京都)

こちらの写真を見て詠んでいただきました。



(写真提供：中川 肇さん)

フォトイック

- 192 道遙か天道虫の門出かな
齋藤光雄(新潟県)
- 193 三伏の世界を跨ぐ己がじし
福岡 悟(東京都)
- 194 テントウムシ麦の穂に休みおり
水落重武(新潟県)
- 195 禾揺るる天道虫のサンバかな
九法活恵(埼玉県)
- 196 赤と黒天道虫のサンバかな
関原幸子(東京都)
- 197 青麦や紅一点の虫すぎる
山崎吉晴(群馬県)
- 198 天道虫発射は中止降りて来い
青木日出男(群馬県)
- 199 天道虫昇りつめたら中天へ
居原田暹(大阪府)
- 200 虫達もみんな生きてるむぎのあき
五十嵐陸博(新潟県)
- 201 葉にゆだね天敵を待つ天道虫
宇都木安子(東京都)
- 202 一陣の風の音生む麦穂波
日名子春実(群馬県)
- 203 この先は宙に羽根割る天道虫
三津木俊幸(千葉県)
- 204 てんとむし感情線を遡り
椋本望生(大阪府)
- 205 滑走路目指し天道虫攀じる
梶 鴻風(北海道)
- 206 果しなき宙へ飛び立て天道虫
近藤薫也(千葉県)
- 207 天道虫麦の穂にゐる楽しけれ
光成高志(千葉県)
- 208 テントウムシおやつ時間ですよ
長谷川庄二郎(千葉県)
- 209 アートして美度の高さを天道虫
有田裕子(北海道)
- 210 真夏日にほっと一息赤と黒
小山恵美子(大阪府)
- 211 てんとう虫や光を求め輝かし
五味田幸夫(東京都)
- 212 宙よりの拡大鏡で見ゆ天道虫
二瓶邦枝(埼玉県)
- 213 麦の芒闊して巡る天道虫
津田卿雲(岡山県)
- 214 育つてね私がこの実を守るから
阿部徳夫(宮城県)
- 215 この写真私が主役天道虫
松前邦広(千葉県)
- 216 この構図絶賛したきてんとう虫
柳澤京子(宮城県)
- 217 てんとう虫自分信じて時を待ち
阿部澄江(宮城県)
- 218 穂先まで登ってもとる天道虫
堅田秀子(東京都)
- 219 麦の塔バベルの塔よりきついなあ
濱崎祥子(鹿児島県)
- 220 碧天や穂先に遊ぶ天道虫
本庄準也(埼玉県)
- 221 隠れてもおしゃれな姿すぐ見つけ
奥那於子(大阪府)
- 222 一匹じゃサンバのリズムさみしいね
佐伯セツ子(香川県)
- 223 群れはずれ孤独のつらさ思い知る
長峰正晴(千葉県)
- 224 飛び立てば別の世界が天道虫
大阿久雅子(埼玉県)
- 225 天道虫登りつめれば深き空
片山茂子(埼玉県)
- 226 麦秋やテントウムシ虫がしゃしゃり出る
岩崎政弘(岡山県)
- 227 天道虫なりし昔や今生きて
岩村 昇(神奈川県)
- 228 むぎの穂はテントウムシが守ります
河野静子(埼玉県)
- 229 大麦の穎果にてんとう色を添え
田中豊恵(新潟県)
- 230 麦の穂に何の因縁天道虫
佐野和彦(静岡県)
- 231 麦畑テントウムシも色添える
高橋登志子(新潟県)
- 232 穂先より宇宙に発ちぬ天道虫
寺内 侑(埼玉県)
- 233 行く先は遠くゆつくり登らうよ
清まさじ(静岡県)
- 234 麦笛や餓鬼大将の見え隠れ
中野勝子(鹿児島県)
- 235 飛び立つな美は万緑の中にあり
久本にい地(岡山県)
- 236 こんにちわちよとお話しませんか
鈴木蝶次(宮城県)
- 237 無我の境天道虫のひとりかな
神 一男(静岡県)
- 238 天道虫に問ひたし逆止まりのりゆう
安部 哲(新潟県)
- 239 麦の穂に癒し求める天道虫
星 一子(神奈川県)
- 240 麦秋やもうすぐパンとラーメンに
大場艸月(長野県)
- 241 ひたすらに彼氏来るのを待ってます
橋本世紀男(東京都)
- 242 暮れ泥む麦に休まふ天道虫
黒岩正子(埼玉県)
- 243 てんとむしひとりほつちで旅にむ
齊藤安弘(神奈川県)
- 244 麦の穂もアクセサリーつけ澄まし顔
岡村君枝(茨城県)
- 245 青麦や黒の斑点似合けり
藤井春三(埼玉県)
- 246 テントウムシ実った麦の味良好
西山知子(岡山県)
- 247 麦秋や天道虫の逃避行
山田楽山(埼玉県)
- 248 麦秋や目立ちたがりのてんとう虫
井田由利子(宮城県)

(写真提供・伊丹三樹彦さん)



俳句・川柳募集!!

上の写真から、自由にイメージし五七五(俳句か川柳)で表現してください。応募はアンケートハガキ投稿欄にて。お待ちしております!



- 249 青い麦てんとう虫の胸飾り
中林恵子(大阪府)
- 250 終点です麦の穂先の天道虫
村山徳英(埼玉県)
- 251 テントウか苞子の水はアーマイカ
合田浩子(茨城県)
- 252 掌に乗って登校てんとう虫
高垣勝代(大阪府)
- 253 善悪は青麦ぞしる星の数
小川 暘(大阪府)
- 254 紅一点目立ちたがりやてんとう虫
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 255 てんと虫ひとりほつちで一休み
岩崎令子(大阪府)
- 256 この先を一人思案のてんと虫
本間 進(新潟県)
- 265 飛び立ちの頃はかる天道虫
安田芳江(茨城県)

◎川柳部門
16 できること奪われてゆく老いてゆく

小山恵美子(大阪府)
・加齢が今までの自分から諸々な事を奪ってゆく歯がゆさを感じます 長谷川庄二郎(千葉県)・老境を云い得ている 土屋喜雄(山梨県)・同感です

・久保壽雄(北海道)・今の思いです。「老い」は非情です。成り行き任せと、ひらきなおりますか 奥那於子(大阪府)・同感です。日毎にひしひしと感じます。長生きはありがたいです 鈴木蝶次(宮城県)・拝読してなるほどと気づく感じです 間森 坦(兵庫県)

3 ジャンケンの結果あなたを看取ります
木村洋一(新潟県)

・ジャンケンで看取りか、関係がよろしいなあ 原 崇雄(埼玉県)・暗いテーマをユーモアで表現。神が決めるのは？ 宇都木安子(東京都)・妻に看取られ先に逝くのが望みだが後先きをジャンケンでと意表を突いた 目黒豊光(福島県)

◎俳句部門
29 聖五月誰に気兼ねなき余生

井原穂子(東京都)
・余生はそうありたいものです 大谷 茂(埼玉県)・老後は自分の思うままに過したいものです 大阿久雅子(埼玉県)・余生の考え方がうらやましい次第です。この句は聖五月がきいていきます 片山茂子(埼玉県)・私もそんな

境地に達する日が来るのでしょうか 若月理依子(新潟県)・そうなりたいたい夢うつつ 有坂馨園(福島県)・気が楽なのが最高です 溝畑美代子(埼玉県)

63 花の日や死ぬより病むを怖れけり
大阿久雅子(埼玉県)

・死は誰にでも訪れる。長く病むことなく穏やかに逝きたい。「花の日」が効果的 高崎登喜子(東京都)・私も死ぬより怖い寝たつきり 黒澤正行(福島県)・「寝たきりで病むことより死を望む」に賛同 関山恵一(神奈川県)・同感 大場艸月(長野県)・「死ぬより病むをおそれけり」全くそうですね 浅海和代(東京都)・私の今の気持とピツタリ 黒岩正子(埼玉県)

68 桜餅ひとは夫の佛前に
堅田秀子(東京都)

・桜餅ひとはご自分で？なんとなく滑稽。私に似ているから 天野輝子(東京都)・亡きご主人にいつも優しい心をもっているところが美しい 松山柚子香(東京都)・早逝の夫を偲んで、一緒に桜餅を食べよう。今も変らぬ愛情ありあり 大橋恒次(新潟県)・やさしさ 岩崎政弘(岡山県)・桜餅は、亡き人の〈転生〉の姿。六・七月号十一頁〈尊敬し大切なものを捧げる〉(朝倉安都子さま)の具現と共有 中村康浩(福岡県)

100 ちゃぶ台に若き父母昭和の日
吉里ひとみ(東京都)

・大家族の為手に入れましたが今は一人となり粗大ごみに申し込んでいま

す。思い出、悲しいことたくさんあります 渡部美代子(山形県)・戦中の我家の夕食を思い出す 石尾曠師朗(東京都)・そのお母さんは、元先生だった。我が家もそうだった 五十嵐陸博(新潟県)・上五の「ちゃぶ台に」が佳い 近藤薫也(千葉県)・昭和を生きて来て我も八十二年終ゆる 中嶋清子(佐賀県)

◎短歌部門

164 夫の手をさすればいつか人肌のぬくもりつたうことの嬉しき
佐伯セツ子(香川県)

・老老介護のようですが「夫婦」と云う「愛」を感じます 青木日出男(群馬県)・夫をささえる妻。御夫婦のやさしさを感じました 中沢敬子(千葉県)・病の床についている夫の手を思いを込めてさする妻。その思いが伝わったうれしさを素直に詠んでいる 早坂保文(宮城県)

170 たましいの抜けゆくような心地して
エレベーターの一隅のわれ
北岡 晃(兵庫県)

・下りエレベーターでしょうか？感覚的に深い共感を覚えます 小林七重(新潟県)・「たましいの抜けゆく」という表現に感動しました 橋本世紀男(東京都)

◎フォトイック

今回大賞はありませんでした。

◎他にも

4 前かがみ杖を突いても子を案じ
守屋高雄(岩手県)

28 碧天のひかり啞へて落雲雀
川口 襄(埼玉県)

37 末の子はすねて泳がず鯉幟
佐藤儀雄(北海道)

50 富士山を見上げて遊び蝸牛
湯浅芳郎(岡山県)

52 古稀の日も恋せし頃も合歡の花
磯部 力(新潟県)

58 二等辺三角形の花筏
二瓶邦枝(埼玉県)

60 飯りの世に生かされてをり紙風船
橋本良子(埼玉県)

67 ちゃんばらの遊び場となる菅浦風呂
長峰正晴(千葉県)

69 九条を変ふるべからず花は葉に
鈴木清子(埼玉県)

71 噛み切れぬものばかりなる昭和の日
紺谷睡花(東京都)

95 少年は恋秘めしまま卒業す
関山恵一(神奈川県)

103 鮎釣りの男流れの杭となる
寺内 信(埼玉県)

146 縄とかれ風のほほずり庭木の芽
柴田恵美子(北海道)

175 喜寿すぎて捨てれば暮らし楽になる
なれど心ときめく想い出ばかり
合田浩子(茨城県)

180 子の贈りし杖を頼りに庭先を三歩
あるく如月の朝
山田良男(埼玉県)

190 仲よしや霞渡りし通学路
片山茂子(埼玉県)

※今後もふるってご投稿をお願いいたします！

Q

前回のアンケート
夏祭りで楽しかった
思い出を教えてください。

★おみこし・山車

時には観客へつつ込んだ遠慮ない子供心を思い出す 松田重信(埼玉県)
ペランダからみこしのかつぎ手に洗面器で水をかけたたら大喜びされた

石尾曠師朗(東京都)

お輿担ぎにかり出され、肩が赤くはれあがったこと 梶 鴻風(北海道)
父と兄と弟がいさましく御神輿やふとん太鼓をかつく姿がうらやましかった

小山恵美子(大阪府)

母が百才迄毎年御神輿を見に行ったこと 大久保アヤ子(東京都)
子供達と子供神輿を造り町内を練り歩いたこと 吉村充治(埼玉県)
男の子に混ざって山車を引いたこと

一瀬正子(埼玉県)

山車の太鼓のにおいと響きが独特 喜龍けん(滋賀県)
祭り山車の屋根でたいたいたシャギリ太鼓 中川義彦(新潟県)
山車を引いて町中を廻り神社についてアイスを買って食べたこと

岡村君枝(茨城県)

★盆踊り

中学の頃の盆踊(思っていた人に会えるかも) 原 崇雄(埼玉県)
高円寺の阿波踊り

内河邦久(東京都)

帰りは鼻緒が痛くとも、踊りの輪は楽しい思い出 九法活恵(埼玉県)

河内音頭を踊っていたころ

椋本望生(大阪府)

本場で阿波おどりを練習したこと

田中 昶(鳥取県)

糊のきいた浴衣をきて盆踊りに夢中だった 濱崎祥子(鹿児島県)
自分で縫ったゆかたを着て踊った

佐伯セツ子(香川県)

やっと覚えた盆踊りをうまく踊れたこと 長峰正晴(千葉県)
各町会に盆踊りを踊り歩いた

大鳥居牧子(東京都)

盆踊りを夜遅くまでみんなと楽しんだこと 小澤円梨(静岡県)
住み込みで働いていた時付き合っていた彼に盆踊りうまいねとほめられた

星 一子(神奈川県)

田舎にも若い人が多くさん居て盆踊りがにぎやかで楽しかった

村山徳英(埼玉県)

盆踊の輪に加わった事 永田歌子(埼玉県)
町内会のそろいのゆかたで盆踊りを踊った事 沖 惇子(大阪府)

沖 惇子(大阪府)



★火花

線香火花を買い庭で火花の散るのを楽しんだ 居原田暹(大阪府)
亡き父との夏祭り、大輪の花火

大橋絵代(千葉県)

また来年も見物しようとききがいを感じる 松尾正一(岩手県)

暑い夜火花を見ながら飲んだ生ビール

久保壽雄(北海道)

真上に咲いた花火の美しさと大きな音 白松いちろう(千葉県)

バブル期の大民謡流しや花火大会。熱気がすごかった 若月理依子(新潟県)
多くの人達と共に家族と花火を楽しんだ 高橋登志子(新潟県)

高橋登志子(新潟県)

楽しんだ後の帰路、大渋滞の思い出 目黒豊光(福島県)
大曲市の「日本一花火大会」を見た事 坂元正憲(東京都)

坂元正憲(東京都)

主人と湯衣で歩いたのは結婚当初、後にも先にも一度だけ 宇都木安子(東京都)

宇都木安子(東京都)

母の縫ってくれたゆかたを着て歩いたこと 三津木俊幸(千葉県)
姉妹で浴衣を着て下駄をはいて走り廻って大きな綿飴を買って貰った

堅田秀子(東京都)

祖母の仕上げた浴衣を着ていっしょに神様の夜店をめぐるたなア 奥那於子(大阪府)

奥那於子(大阪府)

両親・弟と浴衣を着て夜店を見て歩いたこと 大阿久雅子(埼玉県)
自作の浴衣を着て自慢

大阿久雅子(埼玉県)

朝顔の柄の浴衣を着せてもらい火花を観た 小林七重(新潟県)
たもとの長い着物を作ってもらったこと 浅海和代(東京都)

浅海和代(東京都)

四町会合同盆踊り大会、揃いの浴衣を着て「別れても好きな人」を踊った事 仁藤ひろじ(埼玉県)

仁藤ひろじ(埼玉県)

★屋台

出店で駄菓子の買い物が楽しみの一つ 西條公雄(埼玉県)
綿菓子が増き出す様が楽しくて、じっと見ていた

高崎登喜子(東京都)

新潟市沼垂の蒲原祭に夜店をはしこする楽しさ「植木店」等 上村元義(神奈川県)

上村元義(神奈川県)

商店街のお祭りでそろいのはつびでみんなで大売出しをした 北野耕兵(千葉県)
イカの足と耳をしようゆダレにつけた食べ物を買ひ、友達と屋台の食べ歩きした 阿部澄江(宮城県)
小銭を握り駆けつけた夜店のガス灯の匂い 守安幹男(岡山県)

守安幹男(岡山県)

夜店で白桃を買ってもらい、帰ってたべたこと 寒川靖子(香川県)
にぎり狭み一つで作る飴細工を飽かずに見ていた 鈴木清子(埼玉県)
わくわくしながら綿あめの出来るのを待った 川嶋法子(東京都)
新発田祭り。よしず天井の下で娘三人とかき氷を食べた

川嶋法子(東京都)

小学校卒業まで食べさせてもらえなかった「綿アメ」を中学生になって食べた時の感動!

田中豊恵(新潟県)

アセチレンガスのかすかな匂いの中で店をめぐり薄荷パイプを兄弟で買った 寺内 信(埼玉県)

寺内 信(埼玉県)



・十歳の少女にとってお祭の夜店はただわくわく、歩くだけで満足

中澤寿美(神奈川県)

・わた菓子や水あめを自分で買って存分に食べた 井田由利子(宮城県)

・家族で食べたかき氷

小林恵子(大阪府)

・浴衣で延々と連なった夜店の電球の下を歩くと心がワクワクしました

田中こづえ(北海道)

・ヨーヨーつり 細川光子(栃木県)

大谷 茂(埼玉県)

・夏祭りの時三十円もらってパッチを買って友達と遊んだ

水落重武(新潟県)

・うなぎ釣りという出店がでていたこと 白戸麻奈(東京都)

・金魚すくい。母が何時もきれいな風鈴を買っていました

中山日出子(大阪府)

・お盆下駄を買ってもらい、少ない小遣いをもたらった

渡部美代子(山形県)

・ほおずきが上手に鳴った時 松尾らん(東京都)



・ホオズキが鳴らせず、母と練習したこと 高松玲子(埼玉県)

・縁日でぬり絵を買ってもらった

中田文子(大阪府)

・経木箱に入ったアイスクリームを初めて買っていただいた

内藤明子(東京都)

・焼きトウモロコシを買いとてもおいしく食べたこと 杉原明子(静岡県)

・初めて家族一同アイスクャンデーを手にしたこと 中村康浩(福岡県)

・百円のネックレスを買ってもらい、したまま寝て一晩で錆びてしまった

溝畑美代子(埼玉県)

・市松人形を買ってもらいタンスの引き出しにしまつて時々出しては抱いていた

岩崎令子(大阪府)

★その他

・「肩車あの子もきつと忘れない」父親に連れられて夏祭りを見に行つた

石原 岳(群馬県)

・サイダーの味を初体験 阿部 至(埼玉県)

・神社境内での剣道奉納試合に出場した 齋藤光雄(新潟県)

・実家の夏祭りに幼かった二人の子を連れて行ったこと

紺谷睡花(東京都)

・戦後の食糧難の時代、夏祭りの銀舍利をベルトを弛めて腹いっぱい食べた 井上静夫(栃木県)

稲葉民雄(千葉県)

・郷土料理「房総太巻祭り寿司」を父と一緒に捲いたこと

近藤薫也(千葉県)

・実家から母を呼んでまつりで手をつないだ：母の手も私と同じように小さかった

二瓶邦枝(埼玉県)

・夏祭(キャンプファイヤー)で大いに弾けたこと 平林義康(兵庫県)

・青年団の芝居で「赤城の子守唄」の子供役で踊った 峯岸信子(東京都)

・アメリカ人と結婚した娘に四人の子供の誕生「青森ねぶた」見に行きま

した。大感動!! 柳澤京子(宮城県)

・六十年前の宵宮のデート 有坂馨園(福島県)

・おろしたての下駄を履いて石段を昇ったこと 久本にい地(岡山県)

・小遣い銭十円。汗ばむ程握りしめて大切に使いました

橋本世紀男(東京都)

・神社境内に設営された舞台上に旅回りの芝居がかかり、村人が楽しんで観覧した

齊藤安弘(神奈川県)

・結婚した年に初めてシャギリ船を観た時 西山知子(岡山県)

・夏祭りの由来を聞いて飲み交わした事 合田浩子(茨城県)

・「祇園祭」の巡行を初めの一基から見た事 中村久仁子(京都府)

・子どもが小さかった頃七夕祭りの竹飾りの中を肩ぐるましながらかきわけていったこと

早坂保文(宮城県)

・祖母が連れて行ってくれた隣の流灯会。今思えば戦死した父の供養だったのであろう

菅原キイ子(宮城県)

・おとうさんに肩車してもらった 岩崎政弘(岡山県)

・おばけ屋敷の中で眼鏡を落とした友と泣きながら捜し回った 小川 陽(大阪府)

・友達とわいわいしながら歩いた 鈴木義雄(福島県)

祭りの醍醐味

「夏祭りの思い出といえば？」に対し、御神輿や盆踊りという声が多く寄せられました。毎年新潟まつりで住吉行列に参加している、藤井洋介さんにお話を聞きました。



(八番組) 石油 藤井 洋介 さん
(株)藤井 石油 藤井 洋介 さん

七月第三日曜日の早朝、白山神社境内において八番組の纏を作るところから私の祭りが始まります。江戸時代から続く新潟まつりのルーツは湊祭り、当時は別名、七夕祭りとも言われていました。湊祭りの纏灯籠は青森のねぶた、秋田の竿燈などの流れをくむもので、海の神、住吉様を信仰する祭りでした。昼祭りは一番から八番、夜は九番から二十二番が七日間、町を練り歩きました。

湊祭りは町人を主体とした祭りです。纏の「八番」の文字は、江戸時代の書家、巻菱湖の手によるもので、大正時代に当時の豪商であった鍵富家寄贈のものです。釘を一本も使わない組木細工でできた纏灯籠は、当時の木に書かれた番号を基に毎年組み立て、解体します。歴史と伝統の重みを肌で感じることができ、それが私の祭りの醍醐味です。

6-7月号へお寄せいただいたお声の一部をご紹介します！皆様からのメッセージが、私どもスタッフの励みです。率直なご感想や親身なアドバイス、いつもありがとうございます。皆様のお声で、情報誌「喜怒哀楽」がつけられていきます。

- ・ここに響くことば 本の葉としています。はさむたび、読み直し、言葉をかみしめています。
- ・菜根譚23の「静中の静は真の静に非ず」の訓に目から鱗が落ちた感がいたしました。
※ブルー基調、清涼感があります。良いです!!
- ・朝日カルチャーセンター田島主宰のコメント添削が素晴らしくたのしい。皆さんで俳句を楽しんでいます。
- ・井上様の言葉に元気を頂きました。私は三つの癌にかかっていて不安です。生あるかぎり一日一日を大切に感謝して行きます。井上様ありがとうございました。
- ・今、父に言いたいことを読んで涙が浮んできました。色々な思いがありますよね。
- ・「亡き人を偲ぶことは、亡き人から供養されること」朝倉安都子様への想いについて…。夭折の娘のことを思い何度も読み返しました。
- ・道の駅花夢里うちの近くにも欲しい!!
- ・「吉田東伍の世阿弥発見」を興味深く拝見しました。
- ・岩田桂さんの虎魚のエッセイ。楽しく読ませてもらいました。佐渡生れの当方としては、この意を得たりと絶賛!

※今号へのお声も、ぜひお寄せください!

新潟ぶらり



❖ 弥彦山

標高六三四メートル。それほど高い山ではないが山容は美しく、山全体が越後一宮・彌彦神社の神域で、越後平野で最初に朝日に照らされる山^①である。新潟市街からは車で一時間ほど。

彌彦神社は正しくは「へいやはこじんじゃ」だが、一般的には「やひこじんじゃ」と呼ばれる。日本で最も古い歌集「万葉集」に記載があり、さらに「延喜式」で名神大社と記された由緒ある神社。祭神は天照大御神の曾孫・天香山命。神武天皇の勅命で越後の国土開発のため来臨した、文化・産業発展の祖神と伝わる。

境内は広く、暑い日でも参道の杉木立が涼しい。拝殿の背後には弥彦山があり、山全体が神域ということを感じるといふか第六感で感じられるような神々しさ。彌彦の作法にしたがい二礼四拍手一礼で参拝する。

このあとはロープウェイを利用して

山頂駅まで。全長一キロを約五分でのぼってくれる。夏、山頂の気温は地上より五℃も低いという。一万株のアジサイが見頃を迎えていた(七月上旬〜八月上旬)。

アジサイの向こう、山の西側には日本海が広がっている。その先には佐渡が。東側には越後平野が一望できた。青々した田が美しい。山頂駅付近には弥彦山自然館、展望食堂があり、弥彦山について学んだり、景色を眺めながら食事を楽しんだりできる。思ったより長居をしてしまった。

山頂駅からさらに二十分ほど登ると御神廟があり、天香山命とともに妃神熟穂屋姫命が祀られている。とてもいい眺め。神様の夫婦は、これからおとずれの稲穂の波を楽しみにしておられるかなと思った。
(菅真理子)



展望食堂の屋上、天界一望 宇宙台からの景色。右側にあるのはパノラマタワー。遠くに佐渡が見える。
(弥彦山は、新潟県西蒲原郡弥彦村と長岡市の境界にある)



前島密と情報ネットワーク

伊豆名 皓美
いずな ひろみ

にいがた文化の記憶館では、9月14日から11月11日まで企画展示「日本近代化のパイオニアたち」を開催予定です。この展示では、前島密まえじまひそか（上越市出身）・大橋佐平おおはしざへい（長岡市出身）・市島謙吉いちしまけんきち（阿賀野市出身）らを取り上げます。この中から、本稿では前島密（1835～1919）について紹介します。

1947（昭和22）年の発行以来、絵柄が変わっていない切手をご存知でしょうか。前島密の肖像が使われている一円切手です。激動の幕末、若き日の密は、教育熱心だった母・ていから学ぶ喜びを教わり、様々な師の下で語学・漢学・数学・書を航海術などを修めました。国の将来を見据えながら知識を積み重ね、欧米の先進的な国家体制や文化を吸収していきます。その中で、欧米では国中どこにでも情報のやり取りができる郵便制度があり、それが国を豊かにしていることを知ります。明治維新後に新政府の役人となった密は、郵便制度を立ち上げようと動き出しました。従来の飛脚制度を廃止し、西欧の郵便制度を取り入れて「郵便」「切手」「はがき」などの名称を決め、全国均

一料金制を導入、外国郵便の取扱いを開始させました。このように、誰もが平等に簡単に利用できる郵便制度の構築に貢献した前島密は、「日本近代郵便の父」と呼ばれています。

しかし、彼の業績はこれにとどまりません。海運・鉄道業の振興や新聞事業、郵便為替や貯金の導入、電話事業の開始など、日本の文明開化をけん引する数多くの事業に関わり、新しい仕組みを作り上げました。海運や鉄道は人体に例えれば血管であり、これを通じて運ばれる血液にあたるのが物資であり人だといえます。さらにこのネットワークを用いて情報を迅速に伝達するのが、電気通信や郵便事業です。前島密は、現代と同じように、いつでもどこでも誰にでも情報を行き渡らせることが可能な情報網を確立したのです。また教育の分野でも、盲学校の設立や東京専門学校（早稲田大学の前身）の校長を務めるなど、その業績は多岐にわたっています。

密の生家跡地には前島記念館が、そのすぐ横には生誕記念碑が立っています。碑の撰文は會津八一あいつばち・坪内逍遙つばしやう・市島謙吉によるものです。記念館を背に立つ密の全身像は、近代化を果たした自身の生まれ故郷・上越を今も見下ろしています。

※前号の拙稿「吉田東伍の世阿弥発見」中で『風姿花伝』を「世阿弥の著作」としておりましたが「世阿弥の伝書」の誤りでした。訂正してお詫び申し上げます。



▲前島 密

【展覧会情報】

企画展示「日本近代化のパイオニアたち 現代情報化社会の先達」

会期：9月14日(金)から11月11日(日)

休館日：月曜日(祝日の場合は翌日休館)

「食楽句楽のすすめ」の執筆者・岩田桂さんは、岐阜県生まれ、新潟市在住の元大手企業の企画マン。

畑を耕し、俳句の主宰をつとめ「食楽句楽」を実践しつつ

人生のセカンドステージを満喫されています。

食と俳句とのコラボレーション、当意即妙のエッセイをご賞味ください。

食楽句楽のすすめ(21)

丸ごとのどちやう鍋です

岩田 桂

どちやう鍋は夏の季語です。鍋料理なのだが故か夏の季語として扱われる。このへんが俳句界のこだわり。そのどちやう鍋を突つっこくにいたしません。

ボクらの子供の頃には、近くの川や溝にいくらかも泥鰌や鮒っ子がいました。しかし川の汚染でめっきりその数が減ってしまいました。ところが最近になり、泥鰌が多方面から注目されだしています。

佐渡の朱鷺の餌は泥鰌が中心となり、泥鰌が棲める棚田作りの議論が盛んです。二〇〇七年に始まった朱鷺の放し飼いに合わせて、棚田の整備が急ピッチに進みました。もちろん泥鰌が棲める棚田やビオトープ構想が中心です。

一方では、泥鰌も棲まないような田圃で、どうしても安全な米が作れるのかと、「全国民・安全米栽培協議会(仮)」が自然保護に徹を飛ばしています。農業で荒れた農業を見直す動きのシンボルが泥鰌の生態系なのです。いまやこの泥鰌君は自然環境の旗頭となりつつあります。

かたや屋久島の泥鰌がかの東京の浅草に進出し、「鳥起こし」ビジネスとして、にわか騒がしくなってきました。どちやう鍋の自家は浅草あたりだから、屋久島の狙いは正しいのです。

さっそく朱鷺に代わって、その浅草の「どせう家」さんを訪れてみました。泥鰌鍋の味を確かめるためです。

古めかしい暖簾「どせう」を潜って玄関を入ると、昔の風呂番のおじさんが、これまた下足札を渡してくれます。一見、どせうみたくに愛嬌のあるおじさんです。

どじよう鍋どせうの暖簾くぐるより

早速、店の仲居さんに畳の大広間に案内されて、卓袱台の前に座ります。メニューは「どせう鍋」関係だけです。待てよ、「どせう鍋」と言ってもいろいろな種類があるに違いなし。ビールを注文しておいて、しげしげとお品書きを分析します。

そして「まる」「ほねぬき」「柳川」の三種類があることを大発見します。それが「丸ごと」、骨やモツ抜き、そしてほねぬきに牛蒡と卵を加えた柳川」の三品であることは、すぐ理解できます。

「あのお、このまるをくださいなあ」と、仲居さんに注文します。「まるねえ」と、仲居さんはボクの顔を見てニヤリと笑います。こやつは食べ慣れているなあ、と見定めている感じです。

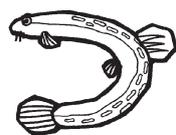
しばらくして、直径二〇センチで深さ二センチほどの鉄鍋に、一八匹ほどの丸ごとドジョウが身を横たえて出てきます。「どじようが出てきてこんにちわー」という感激の初対面です。討ち死にを覚悟した全員が整然と並んでいます。

さっそく割り下を入れて、厚切りのネギをのせて、待つことしばしで、くつくつと煮え上がってきます。「オオツ、そろそろイケソかなー」と、その中の一匹を皿に取り上げ、山椒を少々ふりかけます。口の中に潜り込んだドジョウはホロホロと崩れ、ほのかな苦味が舌の上を走ります。

丸ごとのほろほろ崩れ泥鰌鍋

意外と田圃の泥臭さや匂いはありません。後はビールをグビグビしながら、鍋のドジョウをフウフウと言いながら追いかけて回します。しかも小鍋料理には、常に付きまとう孤独、陰々滅滅、陰気、寂寥感などはありません。実に楽しい。

そして十八匹の「まる」を十分ほどで平らげてお終いです。食べ終えると体がドジョウ踊りするような滋味感に襲われます。おお、効いてきたなあといううれい結末が待っています。



一般に柳川鍋というのは、開き泥鰌とさきがき牛蒡を卵とじにしたものを指します。天保初年、柳川さんの店から発売されたと言うから、ロングランブランドに違いありません。

だから柳川鍋と呼ばれるようになりました。小さな鉄鍋でくつくつと煮込みながら食べる泥鰌鍋は、確かに身体を芯から元気にしてくれます。明日の元気を与えてくれます。

どちやう鍋明日は明日の風が吹く

しかも夏のスタミナ界の料理として重宝されて来たのです。だから夏の季語なのです(納得)。まさに「昔はもてた男たち」の庶民のスタミナ料理です。また最近では、カップルの二人連れが増えたといいいます。女性には人気がないメニューだと思いついていたが、どうやらそうでもないらしい。女史を侮つてはいけません。さらに下足人のおじさん曰く、「どせう鍋」をつつくカップルは二〇〇％デキテルとのこと。

おおよよよ。そう言えばそんなカップルがたむろしている気がしないでもない。するどい指摘であります。

今後は家庭でも増える料理になれば、家内安全という切り札になりそうです。どちやう家族つても悪くはないですね。認知症の予防にもなりそうですね、ありがたい。

その泥鰌は一時、田圃から姿を消してしまいましたが、最近やっと見かけるようになって来ました。天然泥鰌鍋は地球環境のバロメーターとなるエコグルメの一品となりつつあります。

ですから是非、こんな童歌を口ずさみながら召し上がってください。「春になれば、しがこもつけて、どじよつこだのふなつこだの夜が明けたと思おうべなあ」です。元気が湧き上がってくるはず。故郷のことを君にきかせるよううれいね、こんな感じ……。

生国を訊ねられたりどちやう鍋



東区グッドカンパニーの取材を受けました

当社は、新潟市の飛行場の近く「東区」にあります。東区内の特色ある企業の知られざる魅力を紹介し、発信するホームページのサイト「東区グッドカンパニー」があり、過日その取材を受けました。後日、その模様と動画が公開予定です。掲載されましたら再度ご案内いたします!!



▲製本工場内を取材中

東区グッドカンパニー [検索](#)

俳句の選句・整理サービス承ります!

お客さまの困った!
を解決したい

「句集をまとめたい!」、でも「選びきれない」「どういう順番で掲載していいかわからない」という方に朗報です。

ご希望により、俳句の選句や添削、俳句の整理(歳時記に依り春・夏・秋・冬・新年、各季節毎に時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物に区分け、初・仲・晩・三に区分)をし、句集としての体裁を整えます。詳細は同封のチラシをご参照ください。



第25回 夢二忌俳句大会

日時:平成30年9月1日(土) 午前9時受付開始・正午投句締切・午後1時句会開始(囁目3句)

会場:群馬県伊香保 ホテル天坊

会費:3,000円

◎問い合わせ/夢二忌俳句大会実行委員会

〒377-0102 群馬県渋川市伊香保町伊香保397-1

夢二忌俳句大会実行委員会 Tel 0279-20-3555

今年も制作します!
「ご縁ブック2018」
ご注文はお早めに!!

※詳細は同封のチラシをご参照ください

毎年好評のご縁ブック▶



手帖制作をお休みします

毎年この時期に募集し、発行しておりました当社の手帖ですが、誠に勝手ながら制作を休止いたします。長い間、ご愛顧いただきましたことこの場をお借りして御礼申し上げます。

また違った形で、皆さまに喜んでいただける商品をご提案したいと思っておりますので、今後ともご愛顧のほど、よろしく願いいたします。



スタッフの一言

Q.夏祭りで楽しかった思い出を教えてください。

※スタッフ山田の退職に伴い披田野が入社しました!

木戸 敦子



全国一の露店数を誇る蒲原祭りは実家からすぐ。∴祭りは蒲原祭り。学校から帰るや否や友だちと、夜は家族の誰かと1日2回×5日間は必須。終わった時はまさに祭りの後の寂しさ。

古川 久美子



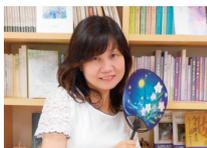
久しぶりに行った祭でかき氷を食べようとしたら、シロップの種類が膨大に増えていて、しかもかけ放題になっていて衝撃だった。今もそうなのか……?

菅 真理子



浴衣を着せてもらえるのが楽しかったです。兵児帯の、金魚のひれみたいなふわふわを見るとわくわくしたなあ。

山田 千秋



なんといっても花火大会。子供時代は近くの河川敷であがったので自宅から良くみえました。トタン屋根に藁藁を敷いて、西瓜を食べながらでした。夏!でしたねえ~(*^_^*)

披田野 裕美



学生時代に片貝の花火を見に行くと、花火に詳しい方から「一番よく見えるから」と教えてもらい、畑の真ん中で途中雨も降ってきて、木の下で雨宿りもしながら見たこと。

木伏 美恵



大きい灯笼をぶつけあう喧嘩まつり。以前は血気盛んな若者が殴り合いになり観客の方にも迫ってきて、妊婦の私はきゃーきゃー言いながら逃げた。おかげで長男はまつり好き。

上村 眞智子



子どもの頃、出店の玩具屋さんで宝石を模したプラスチックの指輪や十字架のネックレスが欲しくて欲しくて、わだつて買ってもらった時の喜びを今でも覚えています。

石山 由希子



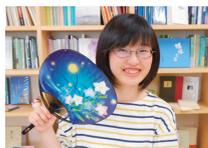
地元の稲荷神社の夏祭。お稲荷様とは別にお社が3か所あって、いつも宵宮でお詣りするときに母が「ここは火の神様」「ここは海の神様」…と教えてくれたものです。

吉田 瞳



初めて行った麻布十番祭りや、高円寺阿波踊り。新潟の祭りとは違った、グローバルで自由な雰囲気が楽しかったです。熱々のアスファルトでお尻を火傷したのもいい思い出です。

佐々木 祥子



祭りといえば法被にハチマキ等お祭り装備に着替え、人の波やにぎわいを感じながらの和太鼓演奏に参加! 熱々のアスファルトでお尻を火傷したのもいい思い出です。



海までいっしょにいった金髪の女の子

やぎもともともと
柳本々々

高校に入ってすぐの頃くらいにほんやり掃除をしていたら、突然クラスメートが階段を駆け上がりながら私に向かって「しねっ」と言った。小さな風がふきぬけるような、軽い「しねっ」だった。

その「しねっ」をうけたときに私ははじめて自分から人生が動ける勇気がわいた気がした。

私はその不思議な勇気で高校を休みはじめた。高校をやめたら、自分にとっての世界なんてぜんぶ終わっちゃうのだから、そうしてそれもちゃんとわかっていたのだが、その世界を自分の手で終わらせようとしていた。ある日たまたま会った友だちの女の子が私に「やぎもとくん、おわっちゃうね」と言った。「あ、そうだね、おわっちゃうんだね。ぜんぶなくなっちゃうんだ」と私も言った。

でも、そのときの自分はぜんぶなくなってもいいなとも思っていた。世の中はオウムや震災、エヴァンゲリオンを経験し、『完全自殺マニユアル』が流行っているようなときだった。

私は高校をとってもそつなく、すみやかに、やめて、自分の部屋でほんやり過ごすようになった。未来が音を立ててなくなっていく。あの女の子の言ったとおりだ。世界は終わったのだ。

その女の子と自転車に乗って海まで行ったときに私は言った。「世界ってとつてもおわるのがかたんなんだね。まるである休みの日に決心して部屋を掃除がけしたみたいにお

今回から執筆いただくのは、同郷の新潟市出身、柳本々々さんです。ご紹介いただいた小津夜景さんいわく「俳句・短歌・川柳なんでも来いの方で、次世代のホープだと思えます」とのこと。3回にわたりにご堪能ください。

わっちゃったよ」「え、でも、わかったことでしょうか。意外にばかなんだね、やぎもとくんって」その子はまじめな顔で私を見ながら言った。光に透けた金髪が風にゆれている。カラーコンタクトのブルー。遠く、近く、波の音がした。

それでも生きていると、ふしぎな変化がやってくる。私が変化するきっかけになったのは、意外なことだが、引きこもりきつたからだと思う。私はその頃、ガンダムをこつこつと観ていた。そのときガンダムに描かれた人間関係、社会設定、言葉遣い、哲学に触れ、これはこの部屋にいただけじゃガンダムをきちんと観ることはできない、外に出なければと思った。私はアニメを観続けることによって、アニメの外に出なさい、というメッセージを受け取った。

後にガンダムを作った富野由悠季さんが「私が願っているのはガンダムを観たひとがガンダムを観ることによってガンダムの外に出て行くことです」と話していたのをテレビで観て、あああのときの自分はあの女の子の言ったとおりばかりだったけれど、それでも正しいことをひとつくらいはしたんだなあとおもった。ちゃんとうけとるということ。

あの女の子がもうひとつ言ったことがある。「やぎもとくんは文学を勉強したほうがいいんじゃない？」私も、そう思った。私は一年、勉強だけを続けた。性に、死に、もまれながら、ひたすら勉強し続けた。文学を勉強するのにならうせならできるだけ大きな図書館がありそうなところに入ろうとおもった。そうして次の年に慶應義塾大学に入った。

2018.8-9. vol.99 (2018年 8月10日発行/隔月発行)
●発行・印刷/株式会社 ミューズ・コーポレーション
〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
0120-819-395 Facebookもチェック
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.esaihon.com
郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社 ミューズ・コーポレーション

編集後記

明日から8月。夏らしいことは何もしていないのに、この暑さでもう十分夏を堪能した気分の今夏。今号で「喜怒哀楽」も99号を数え次号は節目の100号に。過去「笑顔礼讃西東」のコーナーにご登場くださった方で、彼岸に旅立たれた方も少なくない。でも、お話を聞きした際には紛れもなく喜なり哀なりのその時々表情を称え、目の前にいらした。その様子が誌面には残っている。父の生きてきた軌跡を写真の自分史風にまとも父の目にプレゼントした。かけがえのない日々をしみじみ眺めていた。言葉を記録を残す意義。父以上に自分へのプレゼントだと感じた。(木戸敦子)